

合理的配慮の提供事例報告書【中学校】

事例の概要

生徒Aは、自閉症スペクトラムと学習障害がある中学2年生で、B中学校の自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍している。生徒Aは、緊張が高まる場面では、運動性チックが激しくなる。定期テストでは、チックが出て身体が動くことで、周りに不正行為をしているように思われるのではないかと心配と、他の生徒がテストに集中できず迷惑になっているのではないかと心配を常に持っている。

保護者とC病院小児科の主治医と連携をとり、学年でも各教科での実態を共通理解し、定期テストは全て別室受験を行うことにした。

今後は、教科担当の先生と特別支援学級担任が連絡を取り合い、グループ活動や班活動を取り入れながら学習場面での緊張をほぐしたり、小テストを一緒に行ったりしながら緊張が少しでも緩和できるよう工夫し、みんなと一緒に定期テストを受けることができるように本人や保護者と話し合っている。

1 対象生徒の障害種

自閉症

学習障害(LD)

2 障害の程度

非該当(知的障害)

※学校教育法施行令22条の3に該当か非該当か

3 在籍状況

中学校・特別支援学級

4 学年

中2

5 対象生徒の実態

生徒Aは、自閉症スペクトラムと学習障害があり、自閉症・情緒障害特別支援学級に在籍する中学2年生の生徒である。生徒Aは、基礎的な知識理解は身につけているが、相手の心情を読み取ったり、相手のことを考えて行動したり、発言したりすることが苦手である。一度思い込むと、そのことばかりが気になってこだわってしまう。独自の考え方や価値観を持っており、周囲とずれていることが多いため友達とトラブルになることが多い。

生徒Aは、気圧の変化や緊張が高まると運動性チックが激しくなる。特に定期テストでは、頑張ろうとする気持ちが強くなりチックが出る。チックにより身体が動くことで、周りに不正行為をしているように思われるのではないかと心配と、他の生徒がテストに集中できず迷惑になっているのではないかと心配を常に持っていることに悩んでおり、今年度より定期テストは全て別室で行うことにした。

6 対象生徒についての合意形成に至るまでの経緯

(1 誰からの申し出か 2 申し出の内容 3 連携、調整した関係機関 4 合意形成に至った結論)

家庭訪問時に、保護者より緊張が強くチック症状がでるため、テストの時は別室で受けたいという要望があった。また本人からもチック症状に困っているとの相談があった。

学年の先生や教科担当が生徒Aの実態を共有しながら、C病院小児科の主治医とも相談し、定期テストは別室で受験することにした。

7 基礎的環境整備の視点と概要

基礎③ 個別の教育支援計画や個別の指導計画の作成等による指導

生活年齢と精神年齢に大きなズレのある部分があるという主治医や総合教育センターの臨床発達心理士の意見をもとに、保護者と相談し、生徒Aの生活の実態把握を行い記録をつけた。学校生活の中で緊張する場面やそうでない場面、チック症状が出る場面と出ない場面などを記録することで、具体的な目標を設定し、個別の指導計画を見直している。

8 合理的配慮の観点と概要

合理①-1-1 学習上又は生活上の困難を改善・克服するための配慮

学習障害がある為、ノートのサイズをB5からA4に変更し、書くスペースを広くしたり、ワークシートを利用し書字する欄を減らしたりしている。
漢字の練習は、マス目のあるノートを使用し、字の大きさやバランスを意識しやすくしている。
新しく聞いた言葉や難しい言葉を使用したがるが、意味を十分理解しないまま使用することが多いので、間違えた言葉や違った意味で使用した際に、正しい言葉や意味をすぐに自分で確認させるため、保護者と相談の上電子辞書を携帯させている。
気持ちの落ち着け方や、コミュニケーションの取り方についてソーシャルスキルトレーニングやコミック会話等を利用しながら支援を行っている。気持ちを落ち着かすために、クールダウンできる場所を確保し、使用の仕方を事前に各教科担任が共通理解した上で利用を認めている。

合理①-2-3 心理面・健康面の配慮

1年生の時は、交流学級で定期テストを受けていたが、緊張が高まり運動性チック症状がひどく、「カンニングしているのではと思われる」「皆に迷惑がかかる」など、本人が心理的にストレスを感じていたため、C病院小児科に相談し、定期テストは全て別室受験を行った。それによって、不安や心配がなくなり穏やかな表情で過ごすことが増えた。テスト中は緊張も少し和らぎ、落ち着いて受けることができる。
チック症状が出ていない活動や場所を記録し、A生徒自身に確認させることで、常に症状が出ているのではないかという不安とストレスを軽減している。

9 成果と課題

今後は、教科担当の先生と特別支援学級担任が連絡を取り合い、グループ活動や班活動を取り入れながら学習場面での緊張をほぐしたり、小テストを一緒に行ったりしながら緊張が少しでも緩和できるよう工夫し、少しずつ集団の中で活動ができるように本人や保護者と定期的に見直しを行い支援方法の改善を図りたい。
コミュニケーションに関しては、肯定的に物事をとらえ、生徒A自身が自分の特性理解を深めながら活動できるよう支援を継続していきたい。